

一番茶句会報

2017 平成二十九年
十一月号 (586)

伊吹嶺二十周年記念俳句大会記

中村 たか

平成二十九年十一月十八日 土曜朝からあいにくの雨となったが、静岡支部からは十八名参加することが出来た。今年も、伊吹嶺の主宰が交代されるということで少し緊張もあったが、花村富美子さんの新同人推挙、大石ひさをさんの九十才のお祝いがあるという嬉しいバスの旅となる。

会場のヒルトンホテル名古屋で午後一時より開会、総勢二百九名、来賓十九名という盛大な会となる。

まず内田陽子さんの司会で、過去五年間の物故者への黙祷をし、主宰の挨拶の後、議事に移った。主宰交代に伴う規約改正、年間活動報告、会計報告で議事は承認された。続いて下里美恵子さんの司会で、二十周年記念の各賞の発表と表彰があった。新同人八人の中に静岡からは花村富美子さんが紹介され、私共の大きな喜びとなった。栗田主宰から「これからが勝負です。同人になってどっこいしよと休まないように」とお祝いと励ましの言葉が掛けられた。続いて卒寿のお祝いがあり、静岡から大石ひさをさんが受けられた。満場の拍手だった。

来年主宰を交代される栗田先生は挨拶で「あいにくの雨だが涙雨ではない。創刊以来二十年、皆様のおかげで今日を迎えられたことを喜びたい。伊吹嶺発刊の言葉『伊吹嶺』は俳句における文芸性の確立を念願して創刊された『風』の理念を基本に据え即物具象の俳句を目指すと共に、日本の伝統詩としての俳句を若い世代に正しく伝えることを目指す、この基本理念は変わらない。一人一人が受け継いで発展させていって下さい」と話された。

新主宰となられる河原地先生は、栗田先生はまだ十年、二十年出来る力はお有りだが、伊吹嶺は皆のものだという先生の思いを受け継ぐ決心をしました。指導者を信じて研鑽していって下さい」ときっぱり挨拶された。

永年の功労者に花束が贈られ、創刊以来のたゆまぬご指導に対し栗田先生ご夫妻には満場の拍手の中大きな花束が贈られた。

丹羽会長のと新同人会長になれる小長哲郎氏は、伊吹嶺の伝統を一生懸命引き継いでいかねばと思っっています」と決意を述べられた。

第二部俳句大会があり、休憩の後、今瀬剛一 対岸「主宰の記念講演に移る。演題は『芭蕉と現代俳句』。『芭蕉体験』三冊子を読む』平成十七年刊」が始まる。今瀬氏は根っからの水戸っ子、古武士の風格のある方で、ご自分の体験に合わせ芭蕉に託した考えを熱っぽくお話しくださった。

俳句は一般の人に合うように作るのは易いことであるが、一人二人に納得させる句を作るのは難しい。また、孕句といって、採られそうな句をあらかじめ作って持っていくのは良くない。

虚子の「遠山に日の当りたる枯野かな」を人生のあこがれかと人が聞いたら、そのまま詠んだのだ。だって見ちゃったんだもの」と言われたとか。句はそんなもので、現場で純粹に物を見つめ、直感することが大事である。作品の形としては、一箇所良いところがあるのが上品、事実の奥にある真実を捉える集中と、直感が大事である。常に勉強して自分を太らせておけば、それなりの句ができる。心が痩せていては良い句は出来ない。

俳句は自己表現ではないか。生き様は下手でよい。生きてきた証を詠み続けていきたいものだ。と最後まで熱のこもったお話でした。最後に今瀬氏の思いの籠った心の句を披露してください。

鶏頭花母は必死に産みたるか

剛一

休憩の後、記念祝賀会となり、来賓紹介、椋山女学園大学の学生方のフルート演奏とソプラノによる「懐かしい日本の歌ライブ」を

聞かせていただき最後に全員で故郷を合唱して楽しい時を過ごした。

次次と来賓の祝辞があり、栗田先生の御人柄が讃えられた。閉会の辞で小長新同人会長は「二十周年は一つの区切り、また皆で楽しく踏み出そう。栗田先生には感謝あるばかりです。新主宰にはこれからお導き頂きますようお願いいたします」と述べられた。来賓方を拍手でお送りし、お開きとなった。

いつか雨はあがり、それぞれ思いを抱いて帰途に着いた。伊吹嶺の未来は明るいと思った。栗田先生の「句は狙うものでない、目指すものだ」を心に頑張っていきたいものである。

伊吹嶺二十周年記念大会入選句

- | | | |
|-----------|-----------------|-------|
| 栗田主宰 特選 | 千切れ飛ぶ雲の白さよ子規忌来る | 伊藤 範子 |
| 河原地副主宰 特選 | 晩学の夫に試験や秋暑し | 澤田 充子 |
| 岡田佳子 特選 | 炎天へ車椅子漕ぐ太き腕 | 杉浦ゆき子 |
| 磯田なつえ 選 | 膝に置くパナマ帽子や銀座線 | 橋本 紀子 |
| 岡田佳子 選 | 小手に入る鋭き一打玉の汗 | 松永 和子 |
| 関根切子 選 | 検閲の父の手紙や敗戦忌 | 橋本 紀子 |
| 中野一灯 選 | 帆船のはや点となる雲の峰 | 多々良和世 |
| 森 靖子 選 | 夜濯や赤子の泣くを聞きながら | 池村 明子 |

紹介を受ける富美子さん



栗田先生・せつ子夫人



卒寿お祝いのひさをさん



河原地先生



・私の好きな句・九月号より

蝸の声に包まる湖の宿
 女子会の乾杯はお茶きのこ飯
 新涼や卓にこぼれし粉薬
 木洩れ日に揺るる蜘蛛の囿七色に
 月明かり窓辺の床を照らしをり

辻 桂子

坂本 操子
 下河辺美乃里
 夏目 悦江
 花村富美子
 八木 洋子

卒寿を迎えて



大石 ひさを

今年九月で卒寿を迎え、若いですねと言われたり、伊吹嶺二十周年記念大会に於いても卒寿の紹介とお祝金を頂きましたが、本人はそれほど変化のない毎日を送っています。心臓や泌尿病で定期的に検診を受けていますが、御蔭で変りのない日々を楽しんでいます。

俳句との出会いは、平成の初めがスタートです。三十年というサラリーマンの長い変転生活(岡崎・宇都宮・山形・埼玉・東京)と 仕事を終えて帰郷しました。自宅の廻りは知らない人ばかり、とにかく多くの知人を持つと考えた矢先、町内の文化祭で 俳句会に入りました。「のちらしを見て申し込んだのです。以来二十五年になります。色々な会に入り、友人も増えましたが、役職を頼まれたりと俳句以外の仕事も多くなり、皆様に及ばぬ句作生活を送っているこの頃です。人生九十年、残された楽しい生活の中で、皆様に誉めて頂けるような句を残したいと思っています。

卒寿を祝して献上 瀬名笹百合句会の仲間より

菊晴れや背筋正しき友卒寿

漆畑 一枝

万年青の実豊饒として卒寿なほ

卒寿とは思へぬ句友秋高し

大森弘子

卒寿の友今年酒提げ祝ひけり

胸を張り九十回の秋迎ふ

片井克子

冬めくや九十歳は恋の唄

卒寿なる足取り確か紅葉狩

前田 二三

秋の宵卒寿が唄ふ恋の歌

新酒酌む卒寿謳歌の好好爺

松本恵子

健やかに目指すは白寿紅葉鍋

もちの実句会

No. 549

H・29・11・16

大いなる九十九島碑秋の蝶

磯田 秀治

赤米と黒米混ざる登呂稲田

かちかちに踏み固められ登呂刈田

芒原なるや姉川合戦地

伊坂 壽子

真夜覚めて水鳥の声通りけり

暮れ残る桜紅葉のひとつとこ

廃牧の柵に野菊の花盛り

花村すま子

寝ころべる夫へ障子の日の温み

忌明けの供花の吹かるる冬川原

勝見 秀雄

人声の大きく響く冬の山

大根提げ舞に見惚るる媪かな

山本 法子

病む足の置き処なし今朝の冬

退院を祝ふがごとき冬桜

磯田なつえ

朝日差鴨の水輪の数多かな

稲架を組む槌音登呂の空広し

磯田なつえ

飛び立ちて光まとへり稲雀

稔り田の光射し込む登呂草屋

磯田なつえ(報)

瀬名笹百合句会

No. 416

H・29・11・20

冷やかや町の小池の鯉静か

大石ひさを

句友から土産が届く紅葉忌

急病と知らせの電話虎落笛

木犀の香りの中の美術館

どんぐりの音たて落つる外湯かな

漆畑 一枝

小春日へ白く泡立つ堰の水

冬帽子真深に犬と散歩する

孫曾孫総勢九人おでん鍋

卒寿の友今年酒提げ祝ひけり

稲光富士の裾野に幾度も

初雪の富士に叢雲かかりけり

手入れなき土手の花壇に芒ゆれ

秋時雨音なき音に耳澄ます

小春日ややまいの癒えし夫の笑み

来る度にしぐるる里の三千院

富士晴れの川風ほほに欣二忌

早立ちのバスや初冬の町灯り

冬うららライブに合わせ歌ふ宴

大森 弘子

前田 二三

片井 克子

松本 恵子

松本恵子報

安西句会

No. 339

H・29・11・5

立川まさ子

辻 桂子

橋本 紀子

新米の入荷の旗や茶間屋に
秋の日の流れまぶしき大井川
方広寺詣でて釣瓶落しかな
秋の雲何事もなく日の暮るる
濠めぐる小舟に秋の風やさし
病窓に番の小鳥弾みみし
からからと団栗母の抽斗に
秋雨の続く朝や訃の知らせ
寄席太鼓響く路地裏秋うらら

こぼれ萩空家のままの我が生家

延延とテトラポットや月の浦

橘の実の色づけり宮参り

冬近し空を映さぬ海の色

爽やかな風に誘はれ野に出でし

引く波の音かすかなり秋の暮

枇杷の花夜露に濡るる二里塚

金木犀散り敷きつむる遊歩道

ブナ林の蛇行の道や片しぐれ

柿の秋母の忌日の近づけり

知る人の名札さがせり菊花展

松葉杖小春日和の日を浴びて

ばらばらな園児の踊敬老日

ひと畑は大豆の実る登呂遺跡

城濠の鏡の如し水の秋

松永 和子

吉田 明美

渡辺 健司

佐藤 博子

坂本 操子

佐藤博子報

はとり句会

No. 318

H・29・11・10

谷津 政子

藤田 幸子

多々良和世

神尾 知代

豊の秋野良着を脱ぎてフラダンス
ビル街の櫓に沈む椋鳥の群
五歳児の初の白塗り秋灯
秘仏見に賑はひてをり文化の日
島の灯のぼりぼりぼりりと暮早し
到来の大粒みかん文机に
山茶花や母の遺せる玉珊瑚
願掛けの漆の瓢秋徽雨
立冬や入浴剤をにぎり湯に
顔役が固むる四隅宮相撲
赤のまま集落望む陣屋跡
初紅葉雨の古刹の抹茶席

台風の去りし朝や富士に雪
文化の日電子辞書より鳥の声
洪皮煮友丹精の大き栗
草の花耳札多き牧の牛
大道芸丹波焼栗剥きながら
海の色藍深くして冬に入る
廃校の丸き時計や秋夕焼
里山の草焼く匂ひ秋の暮

樟ヶ谷句会

No. 147

H・29・11・23

留処なく原爆ドーム木の葉降る
広島やお好み焼へ牡蠣五つ
青き目の子の折鶴や秋の晴
切手買ふ小春日和の島の局
冬うらら島の神への二百段
晩秋や芝生に揺るる木木の影
黄葉せる銀杏の大樹美術館
城下町銀杏黄葉の分離帯
軒下や等間隔のつるし柿
黒米が凭れ合ひをり登呂稲田
幼連れ登呂の稲刈る若夫婦
鎌と脚たたみ蟻螂果てゐたり
しなやかに雨受け流す娑羅紅葉
祭殿の屋根に逃れし稲雀
竹の春家建ち初むる分譲地
松の枝を稲架に赤米十束ほど

新川 晴美

磯田なつえ

花村富美子

神尾知代報

土本かず子

下河辺美乃里

斉藤真理子

磯田 秀治

磯田なつえ

中村 たか

磯田なつえ報

かんがるー句会 No. 111

H・29・11・9

木々の間の野点の席や薄紅葉
爪楊枝ほどの蠅螂枯れにけり
飴色の茶工場の壁冬日入る
猫膝に開く歳時記夜寒の灯
木の実降るベンチに夫と手弁当
秋晴の富士の山肌黒黒と
焼きたての栗のケーキや日曜日
自転車を磨く父と子秋麗
気に入りの軒下に居り尉鷗

西川満寿美

渡辺 公美

小林 智子

杉山 美波

勝見 秀雄

中村いく代

磯田なつえ

小林智子報

関根 幸子

池村 明子

番町句会 No. 53

H・29・11・17

冬の田に一面にまく粃の殻
今は亡き友の話や夜の長し
住職の訃報届くや冬の雨
リュックよりはみ出してをり大根葉
畦跨ぎ稲架組む小さき登呂田んぼ
教会の弥撒の張り紙花八手

降り立ちて初冬の風や旅の果
肌寒や雨にけぶれる烏鎮の灯
雲の色映す西湖や落葉踏む
秋の庭翅の大きなままだら蝶
一人居の卒寿へ分くる栗の飯
五十年経ちたる庭の松手入れ
干し物につく亀虫や冬隣
リハビリを終へじんわりと冬の汗

向日葵句会

No. 26

H・29・11・8

立冬や雪の無き富士小さく見ゆ
鉢植の大豆やうやくふくらめり
晩秋の空うす紅に暮れそむる
亡き母の愛でし石路咲き初むる
係留の小舟の軋み月の湾
たをやかな菩薩を拝す菊日和
ひとむらの石路の花咲く試歩の道
公園に競ふ輪投げや秋日和
鉄塔に大学の名や秋うらら
秋晴や彫像のごとパフォーマー
黄落の街に道化師笑ひの輪
秋うらら辻のパン屋に人の列
残る虫羅漢の道の途切れなし
満天星の紅葉尽せり奥大井
秋思秋思やトロフィーも断捨離し
磨かれし空の広がる野分あと

八木 洋子

佐藤 ハル

磯田なつえ

山本 法子

磯田なつえ報

土本かず子

橋本 紀子

藤田 幸子

佐藤 博子

下河辺美乃里

多々良和世

立川まさ子

坂本 操子

佐藤博子報

レモン俳句教室

No. 32

H・29・11・14

刈り揃ふつつじの垣根返り花
釣瓶落し闇に消え行く遠き富士
郵便夫釣瓶落しの街を来る
冬麗や登呂に赤米炊く煙
暮の秋親しき友の急逝す
枯蝻螂まなこの奥の濁りをり
茶の花や発掘進む天守台
駈け出してすぐに抱っこや七五三
青空や男二人の松手入れ
初孫の腕にずっしり十三夜
ケンケンパ釣瓶落しの路地の奥
投げ銭を釣瓶落しの山高へ
間引菜を朝のサラダへふんはりと
立冬の山より湧けり群鴉
◇兼題 初霜 釣瓶落し 帰り花 俳句の基本形 季語十も
のから成る句 中日俳句教室講義録 05・5・17 を読んだ。

松永 和子

池村 明子

前田 恭子

八木 洋子

斉藤真理子

榎戸万里子

磯田なつえ

磯田なつえ報

静岡同人句会

No. 82

H・29・11・4

玉砂利の軽き足音七五三
秋霖や漁夫の眉間の深き皺
新築の間取りあれこれ夜の長し
青空に残る榎榎や欣二忌
寛解の友と語らふ夜長かな
齒科の窓口開くとき秋入日
秋高し黒牛の背の艶やかに

富美子

法子

操子

悦江

磯田なつえ報

私の一句

薫風が鷗吹き上ぐ丘の街

すま子

花村すま子

二〇一二年初夏、初めての海外の旅。娘の住むトルコのイスタンブールへ、七十五歳の一人旅です。引込み思案の私には大冒険でした。

まず旅の手続きから始めなくてはならなかった。旅行会社の方が老人でも解るように、品川駅で成田行エキスプレスに乗り、空港では第一ビルへ着くようにと手配してくれた。とにかく何もわからなないので、宅急便で荷を受け取ると「次はどうする」と係の人に聞いては進み、ようやく搭乗口へ辿り着き、十二時間の飛行が始まった。

到着のトルコ空港には、娘が大手を振って迎えてくれた。イスタンブールの街は、なだらかな丘を埋め尽くす様に、クリーム色のアパートビルが建ち並んでいる。車の渋滞するところには、ペットボトルを掲げて水売りの少年が立っていたり、スマッツという穴の開いたパンを棒に刺して、売り歩く面白い風景に出会った。娘の住む三階の窓からは、ボスフォラス海峡が見渡せ、鷗が薫風に吹き上げられて、街の空高く舞っていた。そんな風景の中の一句です。

帰りの空港では娘と別れて一人になり心細い気持ちで搭乗を待っている、向いの席の方がお一人ですか、私はカイロ駐在だが、初めて母が来てくれた時のことを思い出しましたよ、みんながいるから大丈夫だよ。」と声をかけていただき安心したし、同席の娘さんには、機内食の通訳など何かと親切にしてくださいました。

こうしてみなさんの温かい心に支えられての、思い出深い旅となりました。

◇◇・こだま・◇◇

関東支部の三井あきを様より十月号の好きな句を挙げてくださいました。感想も添えられていたのですが割愛させていただきます。

ぶどう梨柿のタルトや誕生日

杉山 美波

神輿渡御笛や太鼓の土手伝ひ

新川 晴美

金木犀ひよこの色の産着干す

松永 和子

ショーケースかぼちゃプリンが真ん中に 磯田なつえ

！投句はお早めに！

静岡新年大会

◎投句〆切は 一月一〇日(水) 必着ですが、年賀状配達と重なること、配達の休みもありますので、なるべく十二月のうちに投句しましょう。 ※詳細は先月号参照

投句先 〒四二二-一二二三 葵区山崎二一九-二八

神尾 知代 ☎二七八-七五六〇

※・※・おめでとぅ ※・※

中部吟行俳句大会 県俳句協会) 十一月十二日開催

県俳句協会賞・堤信彦特選

芒長き登呂の掛稲地に触るる 磯田なつえ

県文化協会賞・吉村巴特選・金子徹特選

稲架掛けて赤米の禾地を擦れり 中村 たか

優秀賞・太田依子特選・川崎文代特選

稲架組んで富士を遠見の登呂田圃 磯田なつえ

剣持せつ子特選

神渡しさやぎどほしの登呂の杜 坂本 操子

「一番茶」作品鑑賞 九月号

坂本 操子

木洩れ日に揺るる蜘蛛の囀七色に

花村富美子

この句の感動は木洩れ日を受けて蜘蛛の巣が七色に揺れていた七彩にある。美しく優しい詩情豊かな句となった。

高らかに言祝ぐ園児敬老日

佐藤 博子

敬老会には私も何回か参加している。園児達が舞台で唄ったり踊ったり年寄を和ませて呉れます。先ず全員揃って大きな声で、お祖父さんお祖母さんおめでとーございませう」と言った。それを高らかに言祝ぐとした表現がこの句の眼目であり、雰囲気が変わります。

納涼や濠をゆったり手漕ぎ舟

八木 洋子

納涼は夏の夕方涼しさを求めて水辺や木蔭などに出ること、季語に涼み舟がある。濠をゆったり手漕ぎ舟、ゆったりが利いている。何と贅沢で優雅な夕涼みを体験されたことか。駿府城址の外濠の景色が目には浮びます。

新涼や頬に馴染る化粧水

中村 たか

新涼は秋になって感ずる涼しさのこと。普段の何げ無い動作を集めて句にするとこんなすてきな詩になります。頬に馴染るの表現に感動しました。新涼の季語が適切です。

終日を空ばかり見る終戦日

夏目 悦江

あの忌しい戦争が終わった日、前日の夜中まで敵機襲来に防空壕に逃げ惑ったこと。あの日を想えば一日中空を見上げてしまう。今は平和で静かな澄んだ空が広がっている。現在体調を崩されて老人施設に入所して外出もままならぬ中、熱心に俳句を作られているご様子に感服致します。

☆・☆・☆・あ と が き・☆・☆・☆

十一月十八日名古屋にて、伊吹嶺二十周年記念俳句大会が開催されました。二十周年を機に、来年の一月より伊吹嶺主宰を栗田やすし先生から河原地英武先生にバトンタッチされる事が報告されました。栗田先生は顧問として引き続きご指導くださいます。河原地先生は駅伝の第二走者の気分で頑張るとおっしゃっておりました。編集部をはじめ各役員さんも若返りが図られました。今年も後一ヶ月となってしまうましたが、新年大会の投句を早めに準備いたしましょう。

博子

平成 29 年「一番茶」句会一覧

句 会 名	開催週	開催場所	開催時間
もちの実	第3土曜	杓子庵（新聞）	13時
瀬名笹百合	第3月曜	瀬名中央町会館	13時30分
安西	第1日曜	番町市民活動センター	13時30分
はとり	第2金曜	花村富美子宅（羽鳥）	13時
樟ヶ谷	第4木曜	杓子庵（新聞）	13時
かんがるー	第2木曜	杓子庵（新聞）	13時30分
番町	第3金曜	番町市民活動センター	18時30分
向日葵	第2水曜	番町市民活動センター	13時30分
レモン俳句教室	第2火曜	番町市民活動センター	9時
同人	第1土曜	杓子庵（新聞）	13時

一番茶句会報 11月号（586）
 平成29年11月30日 発行
 発行責任者 磯田なつえ（☎054-278-7443）
 〒421-1201 静岡市葵区新聞458
 編集部 山本 法子（部長）
 操子・美乃里・博子・明子・和世
 印刷 番町市民活動センターにて印刷